

断層「割れ残り」活動か

続発で被害拡大恐れも

熊本や周辺地域では、2016年の熊本地震から10年が経過した後も一定の頻度で地震が発生していた。今回最大震度7を観測した地震は16年と同様に内陸型で、震源は大きくは離れていない。専門家は「16年地震の活断層のうち、割れ残っていたところでききたのだろう」と口をそろえる。今後も同様に繰り返し発生し、被害が拡大する恐れがあるとして警戒を呼びかける。

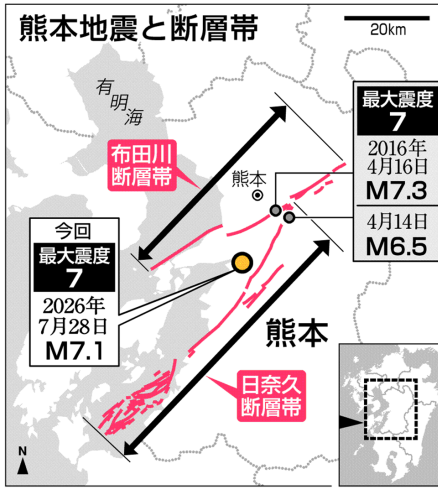
▽より大きな地震
気象庁によると、28日の地震の規模は、マグニチュード(M)7.1。陸域の浅い場所では断層が水平方向に動く「横ずれ型」だ。16年地震との関連について気象庁は明言を避けたが、同じ横ずれ型だった。16年は大きな地震が連続で起こった。「前震」のM6.5が起きた2日後に「本震」としてより規模の大きなM7.3が発生。いずれも震度7を観測した。その後は、主に北東方向へ震源が広がり、M4〜5

級の地震が広範囲で続いた。九州の中央部には複数の活断層が横断するように走っている。16年地震では、前震で日奈久断層帯、本震は布田川断層帯が動いた。

同じメカニズムだとし「16年の地震でひずみや負荷が強くなったことで、日奈久断層帯の一部が動いたと考えられる」と述べた。

遠田氏は地震の規模から、まだ八代海の区域を含めて動いていない部分がある可能性を指摘。「ダメージがあるような建物には近づかないように注意してほしい」として、被害の回避を訴えた。

気象庁は地震直後「有明・八代海」のエリアに一時津波注意報を発表。宮崎公立大の山下裕亮准教授(観測地震学)は「今後、海側の断層帯がずれて地震が発生すると、津波が起こる可能性がある」と警戒感を示した。



16年の地震では、八代海方面へ続く区間がほとんど破壊されていないとたびたび指摘されてきた。今回の地震を受け、記者会見した気象庁の担当者は「さらに大きな地震が起きる可能性も十分に考えられる。1週間程度は震度7程度に注意してほしい」と繰り返した。

▽津波可能性も

東北大の遠田晋次教授(地震地質学)は、16年以降の10年間の地震規模や分布を解析。日奈久断層帯や周辺ではM1.5以上の地震の回数が、以前と比べ約2〜3倍となり、活発な状態が続いていると指摘していた。

遠田氏は、今回も16年と



地震の影響で脱線した貨物列車。28日午後7時8分、熊本県八代市(共同通信社ヘリから)